

# 茶の湯 文化学会 会報

第122号 / 2024年9月25日

発行 茶の湯文化学会

京都市左京区下鴨森本町15

生産開発科学研究所内

〒606-0805

TEL 075-702-9270

FAX 075-702-9314

E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

No.122

## 一つ一つの積み重ね

山田哲也

茶の湯文化学会第八代会長として、今年度から会長を務めさせていただくことになりました。初代会長中村昌生先生以来、委員・幹事、理事、副会長として歴代会長にお仕えし、当学会の発展に微力を尽くしてまいりました身としては忸怩たるものを覚えざるを得ません。通常こうした場合、まず抱負などを申し上げるのですが、今はそのような場合ではありません。自分是一体だけのことをしてきたのか、できたのか、という反省の念にかられております。

まずは会員数の問題です。創立当初はともかく、いつの頃からか、歴代の副会長には「会員増強」の役割担当がつきものとなり

ました。ただ現在のこの担当の副会長はおりません。矢野前会長が副会長から会長に就任された後、副会長は私ただ一人。矢野前会長時代に岡本先生にお願いして副会長になって頂きましたが、また今回私が抜けて岡本先生唯お一人の副会長。まず「執行部」（このような名称は学会の会則にはありませんが、取り敢えず便宜的に使用します）の体制自体正常ではありません。そのような中で、予算編成を考えますと会員数の増加がむしろ急務となつてきております。

利さのみならず、少しでも会員数の増加につながつて欲しい、ということが大きな理由の一つとしてあげられます。

創立以来、年間一部しか発行してこられなかった会誌『茶の湯文化』を、二〇一四年以後、年二部発行制に移行しましたのも、論文・研究ノート、史料の投稿数増加に対応する処置のみではなく、茶の湯文化研究の学術誌として、大学・大学院における研究業績発表の場を提供する必要性がより高まったこと。言い換えれば「茶の湯文化研究の学問的市民権確立」の役割を果たすことでもあり、また、それにより会員数の増加も見込んだ点もありました。

このような本学会をめぐる諸問

題については、『茶の湯文化学会会報』（以下「会報」とします）第一一四号（二〇二二年九月二十六日）に、矢野前会長が「茶の湯文化学会の過去現在未来―三十周年を迎えるにあたって―と題された一文を草しておられますので、詳しくはそちらを参照されたいのですが、会員数の問題を取り上げてもすぐ、一つや二つの問題が出てくるのが現状です。

ところで本会の性格については、「会報」第一〇〇号（二〇一九年三月二十八日）の「会報一〇〇号二五周年を記念して」におきまして、熊倉功夫第四代会長が「茶の湯研究をふりかえって」という文章の中で以下のように述べられています。やや長くはなりますが引用させて頂きます。「本学会は他の学会と異なる性格がある。それは純粹アカデミックな学会ではないことである。私はちょうど五〇年前の『茶湯―研究と資料―』の「はじめに」の中に「茶人自身

の自己学習」に研究者は学ぶところが大きいと記した。現実には茶にたずさわる茶人の問題意識と協同することで茶の湯研究は成立すると考えた。むしろ茶の湯文化学会の会員に実技にかかわる人びとの多いことこそ学会が健康体であることの証左である。しかし問題がないことはない。学術世界と疎遠な実技者にとって学術論文のスタイルを学ぶことはなかなかむずかしい。ここに研究者の出番がある。実技者から研究者は問題意識を学び、実技者は研究者から思いを史料で裏付け論理化する方法を学ぶ場が、学会の中に設けられたら、より素晴らしい将来が開けるのではないだろうか。」

また、田中秀隆理事（元副会長）は「会報」第一一九号（二〇二三年二月二日）の「茶の湯文化学会創立三十周年を迎えて―歴代副会長より」の「一世代を経た学術団体ならではの活動を」という一文において、「茶の湯文化研究

に学問的な市民権が与えられるかどうかは、茶の湯文化研究において同じ土俵に立って相互の見解を披瀝し、発展させる場が、存在するかどうか一つの試金石となる。自身は研究を行わない会員にとつても、真剣な議論の行われる場に立ち会える権利を有することが、その会に所属する魅力と映るのではないだろうか？それが可能な場は、「茶の湯文化学会」をお

いてない。そのことをより自覚して次の十年に進むことが、次の世代の研究者そして、茶の湯文化研究の理解者を増やしていくことにつながるかと考えている」と研究者と実技者の共生こそが本会の特徴であると指摘されています。亡くなられた第五代会長の中村利則先生も、生前本会の使命の一つに、論文作成未経験者への「論文作成指導」を掲げておられました。現在会誌において、会員からの投稿に対し「査読」において常識的な内容を超えたものを各査読者にお

願いしているのも、このような理由によります。また史料の扱いについても、懇切丁寧などいつては少々手前味噌の感がありますが、そのような作成指導が実際なされております。

大学教育において「茶の湯文化講座」の消滅、なかでも博士号を出せる大学が皆無ではないかと、矢野前会長も「会誌」第一一四号で指摘されているように、学会で取り巻く状況はますます悪化してきています。そのような状況だからこそ、熊倉、田中西先生の指摘をどうこれからの学会が受け止めていくのか、正念場をむかえていくといってもよいでしょう。

## 令和六年度総会・大会

令和六年六月九日（日）、同志社大学今出川キャンパス良心館一〇七教室において、令和六年度の大会が開催された。総合司会は



総会・大会

岩崎正彌理事が務めた。前年度の東京の大会と同じく、対面とZoom配信を並行させるハイブリッド形式での大会実施となった。

午前・午後の研究発表を挟む形で開催された総会では、岡本浩一副会長が議長に、吉江勝郎理事が

副議長に選出され、議事が進められ、令和五年度の事業報告ならびに決算、令和六年度の事業計画ならびに予算が、山田副会長と八尾嘉男理事よりそれぞれなされ、原案どおり承認された。

令和六年度からの役員について、会長の矢野環氏が任期満了により退任され、理事に戻られた。新しい会長には、「会長候補者選出に関する内規」に基づき選出された、山田哲也副会長の就任が承認された。

また理事の役割分担として、学会の会計を中心とした業務を担う「会務」が復活し、八尾嘉男理事が担当となった。

「会誌原稿投稿規程」の一部改訂について山田副会長より説明があり、会員からの新たな提案も出され、合わせて承認された。

午前の発表の部では、矢野会長の開会挨拶の後、砂川佳子幹事(近畿)の司会により、次の四本の研究発表が行われた。

一 中村琢巳(東北工業大学建築学部准教授)「数寄屋大工木村清兵衛による箱根美術館茶室「山月庵」の宝形造と七草天井」

二 下村奈穂子(根津美術館)「茶会記にみる片桐石州の茶の湯について―道具の分析から―」

三 依田 徹(遠山記念館)「田藩文庫の茶書―新出の『三冊名物記』を中心に―」

四 宮武慶之(同志社大学京都と茶文化センター)「千利休竹花入銘「園城寺」について―宝永五年の冬木屋による入手―」

各発表内容については、発表者からの要旨が改めて『茶の湯文化学』に掲載されるのでここでは触れない。

午後のシンポジウム「武家相應の茶の湯の成立と展開」は、降矢哲男幹事(近畿)の総合司会により、間に休憩を挟み以下の五本の発表で構成された。

一 山田哲也「武家相應の茶の湯の成立と展開」

二 谷村玲子(実践女子大学文芸資料研究所研究員)「江戸時代の武家の茶の湯―江戸の石州流を中心に―」

三 八尾嘉男「江戸時代前期に流祖となった旗本茶人をめぐって」

四 矢野 環(同志社大学・埼玉大学名誉教授)「大名関連名物記と茶会記の特徴分析」

五 矢ヶ崎善太郎(大阪電気通信大学工学部建築学科教授)「広島城三ノ丸「御囲」の復元と上



シンポジウム

田宗箇の茶室―織部・遠州・宗箇の茶室と「縁（縁側）」―

各発表内容については、前半の発表と同様に要旨が改めて『茶の湯文化学』に掲載されるのでここでは触れないが、最後には質問コーナーが設けられ、参加者からの質問が相次いだ。朝は雨模様であったが持ち直し、終日有意義な時間を過ごすことができた。昨年も痛感したことであったが、普通に行事が開催できたことの有難さをつくづく感じた一日であった。

## 令和六年度懇親会

今年度の大会開催に伴う懇親会は、大会前日の六月八日（土）、見学会の行われた同じ日に、下京区四条大橋西詰南側の東華菜館本店にて行われた。同店はメンソレータムで知られる米国人伝道者・建築家ヴォーリズの設計による建造物で、京都最古のエレベ

ーターが今も現役で稼働している。降矢哲男幹事の司会のもと、谷晃元会長による乾杯の発声があり、午後五時半より八時過ぎまで（やかな時が流れた（参加者五十二名）。見学会が会場の都合で土曜日になったことに合わせた日程で、翌日の大会発表者には少し酷な面もあったが、それにもかかわらず参加した発表者たちは十分に懇親の輪を広げていた。



懇親会（東華菜館本店）

## 令和六年度見学会

宮武慶之

本年度の大会・総会のテーマは「近世における武家相応の茶の成立と展開」であった。そのため見学会について昨年の夏ごろ、矢野環前会長、山田哲也大会委員長の提案により、片桐石州とゆかりの深い、大徳寺芳春院にて開催することとなった。見学会と併せて、学会創立三十周年の記念を含むため、呈茶席を設けることも併せて決定した。なお芳春院住職の秋吉則州和尚様には今回の見学会にあたり、事前の打ち合わせや当日の呈茶席について、何かと格別のご配慮を賜った。また当日は多くの参加者があり、総数は一〇二名を数えた。

芳春院は慶長十三年（一六〇八年）に前田利家の夫人・松子（芳春院）が春屋宗圃の俗甥で、法嗣の玉室宗珀を開山として建立した

〔『都林泉名勝図会』一七九九年刊〕。加賀前田家の菩提寺である。本堂背後にある二重楼閣は、元和三年（一六一七年）、横井等怡が小堀遠州に諮り建立したもので、玉室はこれを呑湖閣と名付けて春屋宗圃（一六一一年寂）の昭堂とした。また池は鮑雲、架橋は打月と称し、打月橋には玉室の筆になる打月の額をかかげる。寛政八年（一七九六年）堂宇は焼失したが、同十年、前田家十三代治脩によって再建、今日に至っている。

見学会当日は芳春院の方丈、呑湖閣及び、北側に位置する茶室の見学に加え、呈茶席（高林庵、さらに道路を隔てた片桐家の墓参）が行われた。

方丈、庭園については矢ヶ崎善太郎理事が担当され、この日のために作成された詳細な資料を元に解説が行われた。また北側に位置する茶室については吉井清理事により、小間の茶室と広間について、所見を述べられた。呈茶席では飯



見学会 (呑湖園)

鳥照仁理事が担当され、今回のために作られた老松製の「慶雲」、さらには小山園詰の「千木の白」で、一碗の薄茶が振る舞われた。

片桐家の墓所には中央先頭に片桐石州の墓を中心に、左右に一族の墓がある。石州の墓は卵のような形状であり、正面に「関」の一字が彫られている。どことなく、墓石が石州の人柄を語るようである。また秋吉住職のご教示によれば、石州の墓に向かって左側奥には、藤林宗源の墓もあるとい

い、一族及び高弟の墓も存在している。普段は墓域に入ることすらできないため、石州の茶人としての徳に触れる得難い機会となり、翌日の研究発表にもつながる見学会となった。

## 例会

### 東京例会

(令和六年五月二十五日)

「近代の万国博覧会における茶道」

### 吉野亜湖

近代の万国博覧会において、茶道は賓客接待や日本の文化紹介としてだけでなく、日本茶の輸出振興のために喫茶店や農業館の中でも展開されるなど、複層的な役割を担っていた。このような万博での展開は、海外での茶道のイメージ形成にも影響を与えたはずである。そこで、茶道が近代の万博の中でどのような役割を期待され、

果たしたのかということをも、具体的に明らかにする。それにより、近代茶道と社会の関りについて新たな一面を見いだせるのではないかと考える。

幕末のパリ万博(一八六七)から茶道具の出品は見られた。続く明治初期の万博では、日本製品に歴史的文化的深みを持たせ、工芸品の使用法解説としても「茶の湯」の情報が必要とされた。つまり、殖産興業政策と国威宣揚のために活用された情報であった。

茶業組合が万博に初参加したシカゴ万博(一八九三)は大きな転機となる。組合経営の喫茶店の抹茶席で点前が初めて万博で披露されたのだ。明治中期以降は、農業館など茶の展示や販促冊子にも活用されたりと、日本茶のブランドイメージを上げる役割を担った。大正、昭和期は、喫茶店から独立した「茶室」が建築され、岡倉天心の『茶の本』の影響もあり、茶道の精神文化を強調する形

になった。すると、より全米の新聞、ラジオなどメディアで注目されるようになる。表面上は純粋に文化を紹介する場となっても、常に日本茶の輸出促進の役割を期待され、それを果たしていたのである。

【参考】吉野亜湖(二〇二二)「近代の万国博覧会で展開された日本茶道」『ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要二〇二〇』ふじのくに茶の都ミュージアム、三八―四七。吉野亜湖(二〇二二)「近代の万国博覧会における茶道…大正から昭和初期までのアメリカ開催の万博を軸に」茶の湯文化学、茶の湯文化学会編(三三七)、四七―六一。

「茶道バイリンガル事典のmaking」  
岡本浩一

実技レベルでは日本人茶人に追いつきつつある外国人茶人にとっ

ての言語的障壁として、つぎのものを指摘した。

一、禅語や銘についての情報にアクセスできない。

二、点前手続についての記憶の劣化・確認情報の不足。

三、道具組の禁則情報にアクセスできない。

四、自分の所属以外の流派の系統、思想がわからない。

五、茶匠についての情報にアクセスできない。

六、伝承と史実の境目がわからない。

それら障壁の軽減手段として「茶道バイリンガル事典」を作成するのにあたり、つぎの方針を掲げた。

a、従来の訳語を見直す／  
exhibiting cabinet<sup>(注1)</sup>

b、道具ごとの概論を置く／釜、茶碗、茶杓、花入など

c、人名項目の充実／活動中の茶匠、茶人、工匠、研究者

d、銘の出版を載せる／禅籍、古

今和歌集など

e、禅語などを多く掲げる／禅語辞典の領域にすこし踏み込む

f、流派項目の充実／多くの流派について中立的記述と「派」まで

g、花押の収載／家元および代表的茶家各代、工房の落款など

h、花押を変えた時期を明細

i、小習点前の手続きを英語で所載／平点前は詳細、小習は要点

j、取り合わせの禁則を道具項目ごとに所載／道具組で確認可能なように

k、棚とともに当該棚点前の詳細を記述／道具組で確認可能なように

l、職方と宗匠の活動期間を明示／年表の形で

m、活動中の著名研究者を収載する／外国人茶人の視点で

n、最新の事実認識に立脚するとともに伝承が果たした歴史的役割に言及

このような方針の下で、3300項目をカバーする二カ国語事典を作り上げた。

### 東海例会

(令和六年四月二十七日)

### 「北宋文化の背景」

田中恵美

北宋時代の書画をはじめとする文化や、その担い手である士大夫層出身の文化人は、中国史上において特別なものとして扱われてきました。日本においても足利義満所持の伝来を持つ、北宋第八代皇帝徽宗画とされる「桃鳩図」が伝わり、国宝に指定されています。ただし、このように日本で長く珍重されてきた北宋画というのは、むしろ少数派です。というのも、日本の茶の湯の文化において、最上位の唐物として伝えられてきた道具類は、徽宗の子の高宗を初代皇帝とする南宋時代のものが多いためです。無準師範や牧谿は南宋の禅僧であり、曜変天目も砧青

磁も南宋のやきものです。そのため、いわゆる「茶の湯の感性」では、北宋時代の書画や文化は理解しづらくなっています。

しかし、南宋以降の中国が憧れてきた北宋の文化と美術は、通奏低音のように日本の文化や茶の湯にも影響を与えてきました。では、それらを生み出した北宋とはどのような時代だったのか、ごく簡単ではありますがその一端をご紹介します。

(令和六年六月一日)

「瀬戸茶入に見る唐物受容とその認識 播座に着目して」

内田昌太郎

唐物茶入は、古来重視されてきた茶道具の一つである。中世以来多くの唐物茶入が将来し、それらを模倣して、瀬戸窯は茶入を生産してきた。その上で、瀬戸茶入と唐物茶入の差異や瀬戸窯における変化を分析することにより、唐物に対するより具体的な認識や嗜好

好、また模倣における意識を明らかにすることを目的とする。

本発表では、特に「播座」に着目し、古瀬戸期の播座の変遷を確認した。施文に顕著だが、十四世紀前半に始まる播座の模倣は、忠実な模倣を志向しつつも、最初期には情報や理解の不足から正確に模倣できなかつたが、十四世紀後半には完全な模倣が可能となる。

しかし、十五世紀以降は大きく様相が変わり、却って独自化・省力化の傾向が強まり、唐物が絶対的なモデルでなくなつてゆく模倣の具体的な段階を明らかにした。十五世紀における変化の要因は、需要層と用途の変化に関係がある。その需要は、播座が目指す宋代中国の喫茶法が直接伝えられたものと、中世の日本は理解した。それ故、播座の需要が長く続いたことを指摘した。

十七世紀に入ると、瀬戸窯では唐物に似た端正な茶入を作り、播座の生産も断続的に再開する。ま

た、瀬戸だけでなく、高取や仁清でも作る。播座の要素は概ね踏襲しているが、近世には唐物を忠実に模倣する意識は既になく、唐物播座を咀嚼した上で、独自に解釈された「唐物」を表現することが近世の志向する茶入であると結論した。

### 近畿例会

(令和六年七月二十日)

「茶の湯にみる朝鮮半島の金欄」

### 中村幸

茶の湯の金欄は唐物と和物に大別されるが、実際には産地や織られた時期の判断が困難なものも多い。他方、江戸期の文献に朝鮮半島産とみなされる印金や錦の呼称はあるが、金欄にその認識は見受けられず、茶の湯の金欄では中国と日本以外の研究はなされていない。

本発表は人形手の「葡萄牙童子紋金欄」に着目し、その時代・産地・

意匠の意味と用途・地組織の報告と共に、茶の湯における朝鮮朝の金欄の一端を明るみに出すことを目的とする。

方法は、韓国現存の十六〜十八世紀の葡萄牙童子紋金欄の衣服、四点(墓出土裳三点、旧家蔵女性上着一点)と、日本の人形手金欄の断片四点(裂帖三点、裂箆笥一点。内二点に「紫地人形焼切」と「紫地人形手安楽手金欄」の記載)の調査と比較考察を行い、以下の結論を述べた。

- (1) 葡萄牙童子紋金欄とは、葡萄牙と童子を交互に配した天地、11cm程を野で囲った帯状の「欄」で、それが上下二段に重なる朝鮮朝の金欄様式である。一五〇三年以降、男子多産の吉祥文として貴族女性の裳に始まり、正装の上着にも縫付けられた。
- (2) 日本の四点の裂は、地組織や金糸の押さえ、紋丈および、童子の頭飾とポーズに、韓国の葡萄牙童子紋金欄との類似性が認めら

れ、これらは朝鮮朝十七〜十八世紀の金欄の可能性が高い。

その内一点は解袋で、もう一点には茶入仕覆の底を切り取った付属品があり、これらは茶人等の仕覆に愛玩されていた。

- (3) 元来、朝鮮朝と日本の金欄と緞子は、中国の模倣に始まる。そして中国産と朝鮮朝産のどちらも貴重な渡りの金欄とされ、その一タイプに「安楽庵手」がある。その傾向は①十六世紀中葉〜十七世紀初めのもの ②名物裂としては大味の感があるもの ③金色は黄味をおびたものとされる。またある船荷で同時期・同経路の一群の裂に発した「焼切・黒船切」のタイプ名がある。これら安楽庵手や焼切・黒船切に、大味な朝鮮朝の金欄が分類されていることが予想され、台紙・接着剤・発色ベース・箔による金糸構造の検証と共に更なる課題としたい。

「八戸藩における高橋道竹流の展開―創作される茶の湯流派として―」

廣田吉崇

陸奥八戸藩の茶の湯については、第三代藩主が石州流を導入したと伝えられ、また、有楽流が広まっていたという。そのほかに、延享二年（一七四五）に鶴飼治右衛門があらわした『茶湯秘伝口決抄』および『古田織部流八十一ヶ条口伝抄』が第五代藩主に献上されている。後者において、古田織部流と称したこの流派は、そのうち、高橋道竹流として展開し、いくつかの座敷飾に関する茶書が現存している。

これらは、A系統本『座鋪飾伝授目録』三本、B系統本『高橋道竹流座鋪飾聞書秘書』一本、C系統本『道竹流書院飭伝』一本、D系統本『高橋道竹伝来座敷莊聞書帳』二本、E系統本『道竹流掛物緒留様雛形』一本と整理分類することができる。まず項目だけの

目録であるA系統本が創作され、徐々に複雑な内容のB系統本、D系統本へと発展し、一方でC系統本やE系統本を派生したのである。

その際に元禄七年（一六九四）版行の『古今茶道全書』を参照したと推測される。以上はすべて八戸藩士により伝承されてきた。

流派の主張のために茶書を作成することも、その際に先行する茶書を引用することも、それ自体は一般的にみられることである。しかし、狭い八戸藩の武家社会において、藩士により新たな流派が名乗られ、しかも何通りもの文書が作成されたことは驚きである。家元制度が確立する以前の、近世の茶の湯流派のあり方を考える参考事例として報告する。

## 北陸例会

（令和六年三月十六日）

「富山のものづくりによる茶道具について」

中川靖子

富山市佐藤記念美術館では、令和五年に特別展「生成―Bringing Things to Life」を開催し、県内で制作する作家達に焦点をあて、富山における芸術表現の「いま」を展観した。彼らが手がける茶道具について、一部紹介する。十六代小原治五右衛門は、城端蒔絵を継承する漆芸家である。作品には漆黒の漆に伝統の白蒔絵と銀蒔絵により、立山を描き巡らす「立山連峰」シリーズがある。小原が「漆の黒は空にも水にもなる」と述べた様に、本作は空と海の間に悠然と佇む立山連峰を想起させる。さらに、本シリーズの棗の意匠は、機能性に考慮し、身と蓋がどの位置にでも合うよう工夫されている。

次に、陶芸家・神谷麻穂は記憶

や五感から得た様々なイメージの断片を、土と独自の色彩・造形感覚により繋ぎあわせた、有機的なやきものを生み出している。茶道具も神谷特有のものづくりの延長線上にあるが、実用をより意識したつくりとなっている。茶碗は、茶が入ることを想定し、土肌を活かして草花や鱗など繊細な絵付けを施す。茶を点てると幻想的な絵模様と渾然となり、味わい深いものとなる。

また、ガラス作家・小路口力恵は、「やさしく、柔らかく、こちょい。」をテーマに作品制作を行っている。「ふくら」と呼ぶ茶道具は、主に吹きガラスで素地をつくり、表面に削りを施す。柔らかく膨らみある形状は蕾や着物の合わせを連想させる。特に手触りにこだわり、すりガラス状の滑らかな質感を出した茶碗は、手に心地よくなじみ、心落ち着かせる。

北陸例会ではこの他六名を紹介した。多くが茶道具制作の専門で



はないが、各々の造形思考にぶれることなく柔軟な発想で茶道具に取り組み、創造性に富む。そこには富山の風土や自然が投影され、この地で育まれる芸術と茶の湯との豊かな交わりが、茶道具に新たな息吹を与えていることが伝わる。

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※日程等未定は、次号の会報またはホームページにてお知らせいたします。ご確認ください。

※東京・近畿例会では、会場とZoomのハイブリッド開催を

行っています。オンラインの参加は、ホームページの例会参加申込フォーマットよりお申し込みと同時に、年会費二千円(会員)・四千元(非会員)をお振り込みください。

### 東京例会

令和六年十二月予定

### 東海例会

令和六年十二月七日(土)

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

(会場：昭和美術館会議室)

加藤祥平(徳川美術館)

「日本中近世における唐絵の受容」

### 近畿例会

令和六年十月二十六日(土)

午後二時～四時

(会場：同志社大学今出川キャンパス良心館RY101・会場とZoomのハイブリッド開催)

豊田裕章(国際日本文化研究セン

ター客員教授・大阪大学招聘研究員)

「後鳥羽上皇の水無瀬離宮と後鳥羽院の喫茶」

宮武慶之(京都と茶文化研究センター)

「世を観る眼 白醉庵・吉村観阿展によせて」

令和六年十一月十六日

午後二時

(会場：同志社大学今出川キャンパス良心館RY401・会場とZoomのハイブリッド開催)

谷直樹(大阪くらしの今昔館前館長)

「未定」

矢ヶ崎善太郎(大阪電気通信大学工学部建築学科教授)

「広島城三の丸茶室の復元―縁(えん)と窓と鎖の間を中心に―」

令和七年二月十五日(土)

午後二時

(会場：同志社大学今出川キャン

パス至誠館S4・会場とZoomのハイブリッド開催)

山本堯、伊住禮次朗共同発表

「胡銅製作技法研究序説」

山本堯(泉屋博古館)

「中国の儒教儀礼と日本の唐物荘厳の関係について(仮)」

伊住禮次朗(茶道総合資料館副館長・今日庵文庫長)

「雲龍釜とその文様に関する一考察」

北陸例会

令和七年三月八日(土)

(会場：発表者未定)

金沢例会

令和六年十一月二十四日(日)

午前九時三十分

(会場：金沢市文化ホール 茶室 閑清庵)

能登半島地震被災者追悼「祈りの茶会」

日時未定

(会場：金沢文化ホール 第二会議室)

北春千代(石川県七尾美術館館長)

「加賀七種ノシコウ茶碗について」

\*金沢市文化ホール 金沢市高岡

町一五一

## 高知例会

令和六年十二月八日(日)

午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶⅤ」

正午～午後四時

軽食茶事 席主 三名

会費 二千元

(参会希望者は予めご連絡下さい)

令和七年二月九日(日)

午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶⅥ」

高知支部2025年度事業計画

## 新刊紹介

『玉島湊の茶室群』

池田俊彦著・玉島茶室群研究会編

定価二、九七〇円(税込)

当学会及び会報編集委員長として、長きに渡りご尽力いただきました池田俊彦先生が顧問をされた玉島茶室群研究会の倉敷美術館での講演など、先生が残された貴重な茶室の調査資料を掲載。

\*詳細は、茶の湯文化学会ホームページ、またはQRコードをご覧ください。

ご覧ください。



『茶事のいまむかし小事典』

中村幸著 淡交社

定価一、七六〇円(税込)

※二〇二四年度年会費を払込みくださいますようよろしくお願いいたします。

